横浜詩人会通信329号

2024.1.15

横浜詩人会事務局　相模原市南区新磯野 4-6-3-205　金井雄二方
発行人　佐相憲一（会長）立川市一番町 1-45-17-203
＊郵便振替　00230-0-5574　ヨコハマシジンカイ／ http://yokohamasijinkai.web.fc2.com/

第55回横浜詩人会賞贈呈式と講演会、盛会に終わる！

講演兼選考委員・大石規子氏

講演・荒船健次氏

受賞者・佐野豊氏

十月九日、第五十五回横浜詩人会賞贈呈式と講演会（対談）が行われた。まず会長の挨拶として、本賞が会員の資金で運営している賞で、歴史があり詩の本質を理解している賞である、受賞した佐野豊詩集『夢にも思わなかった』は奥様との愛を描いており、現代詩では愛を描くことが少ない中、稀有な詩集であるといった話があった。

贈呈式に先立ち、第一部で講演会（対談）が行われた。初期からの会員である荒船健次氏と大石規子氏が登壇。草創期の詩人20名弱を近藤東氏、山田今次氏から細野豊氏まで人柄に関するエピソードを交えときに面白おかしく作品の朗読も交え語ってくれた。

続いて贈呈式が行われた。まず伊藤悠子選考委員長から選考経緯が説明された。日常を描いたこの詩集はこの世界へのなつかしさ、いとおしさが手渡されるようだ、と魅力を伝えた。そして今回惜しくも受賞を逃した詩集にも丁寧に言及し、それらの作品にも票が投じられたことには数では数えられない価値があるとメッセージして

司会・服部剛理事

佐相憲一会長

神奈川新聞 桐生勇文化部長

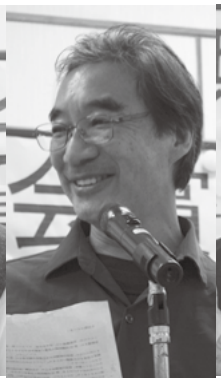
来賓・松下育男氏

伊藤悠子選考委員長

方喰あい子選考委員

鎮西貴信選考委員

谷口鳥子選考委員


光冨幾耶選考委員

金井雄二理事長

締めくくった。

続いて大石規子氏、方喰あい子氏、谷口鳥子氏(理事)、鎮西貴信氏、光冨幾耶氏(理事)から候補詩集や選考の考え方などが語られた。

続いて賞状が佐相憲一会長より横浜詩人会にぜひ入ってくださいとコメントつきで贈呈され、会場が笑いに包まれた。続いて花束が前々回の受賞者、谷口鳥子理事より贈呈された。

そして、来賓の神奈川新聞社文化部長の桐生勇氏より言葉をいただいた。第一部の対談にも触れられ、豊かな時間でしたとコメント。神奈川新聞と横浜詩人会とのつながりは深く、文芸コンクールの審査員のことや、現在も続く神奈川新聞の文芸時評記事について触れ、これからも共に神奈川の文学の土壌を耕していければと結んだ。また記念品の贈呈も行われた。

続いて松下育男氏からの祝辞。佐野氏は松下氏の横浜での詩の教室に初回から参加しており、教室で提出した詩についていろいろ言われてへこんだりもしていたが、めげずに詩を出し続けていた。詩を書くことや生きていくことに「慣れる」ことなく書き続けている、柔軟でいつまでも初々しい詩人である。受賞詩集は世界で一番読んで疲れない、良い意味で敷居が低い詩集で、愛するものを愛するという当たり前のことが書かれたそれゆえ滅多にない詩集だと結び、「ただなか」を朗読してくれた。

続いて佐野氏が挨拶した。過去私家版や小詩集などを作ったが、今回はしっかりとした詩集という念願を叶えることができたこと、簡単な言葉を使っているが、自分としては重たいことや深い悲しみを書いていると語ってくれた。この詩集は理解ある妻の存在がなければできなかったと感謝の言葉を述べ、「暖のとりかた」、「こえのほし」、「ただなか」を読んだ。

そして閉会の言葉が金井理事長より行われた。第一部の対談へのコメントに続き、自分は賞を取ったときに横浜詩人会に入った、今回の受賞は佐野さんに期待しているということであり、これからも自分の詩を突き詰めていってほしい、とユーモアを交え勧誘をしつつもエールを贈る形で会を締めくくった。

終始和やかな雰囲気に包まれ、佐野氏の誠実な人柄も伝わり、暖かい会となった。

その後、近隣の中華料理店で希望者で懇親会が行われた。円卓で料理を楽しみつつ詩の話、横浜詩人会の話、そして佐野氏の趣味である音楽の話に花を咲かせた。

（文責・今鹿仙）

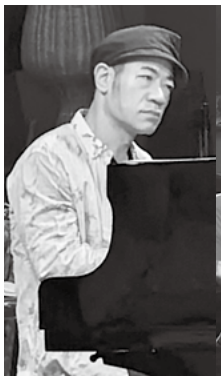
【出席者】

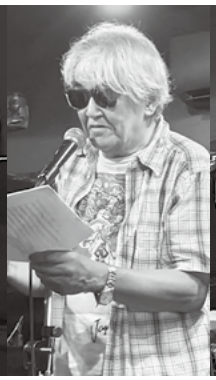
会員（五十音順）：浅野言朗、荒船健次、井嶋りゅう、磯崎寛也、伊藤悠子、今鹿仙、大石規子、方喰あい子、金井雄二、坂多瑩子、佐相憲一、柴田千晶、鈴木正枝、関中子、高細玄一、立木勲、谷口鳥子、鎮西貴信、野木京子、服部剛、原田もも代、松浦成友、三浦志郎、光冨幾耶、若尾儀武

受賞者・来賓：佐野豊（受賞者）、桐生勇（神奈川新聞社）、松下育男（来賓）

会員外（五十音順）：川島洋、北村紀子、こががっこ、篠田翔平、高橋晟子、池英姫、甘楽順治

会場全景


ピアノ・加藤英介氏


三浦志郎さん

水無川渉さん

紗野玲空さん

立木勲さん

夏の日の詩とジャズ 2023を開催

毎年夏恒例の朗読会が8月26日、ドルフィーにて行われた。ジャズピアニスト加藤英介氏の演奏は23名の詩人が朗読するそれぞれの世界に呼応し、満席の店内に夢のひと時が織り成された。

1部の幕開けは三浦氏。ジャズマンのジミー・ジョーンズの個性と物語が伝わる詩。続く水無川氏はブルース歌手のウィリー・ジョンソンの歌と不遇な人生を語り、過去に耳を澄ます詩の世界。紗野氏は青春の詩で、恋をすると自然はより美しく見える感覚が伝わった。

立木氏は韓国人の奥様と共に生きる日々を語り、日本と韓国の哀しい歴史を考えさせられた。松浦氏は無意識化の世界を語り「人が求める命の水とは?」と問うようだった。相原氏は世を去った友や、教え子たちと川で過ごした想い出の詩。磯崎氏はお遍路の旅から帰って間もない詩で「サンスクリット文字を僕の心臓に縫いつける」という言葉からは神秘性が視えた。

原田氏は故郷のなわた汁を作る為に鮭を捌く、生々しくもいきいきとした台所の詩。谷口氏はひい婆ちゃんや婆ちゃんとの会話を小気味よく語った。金井氏は息子さんと流れ星を見た夜の情景の詩や、生まれて間もないお孫さんが家に来る前の心情を、コップになみなみと麦酒を注ぐ描写で語った。冨田氏は小鳥の歌う森を歩き、遠い街の喧騒も含め全てが音楽に聴こえる感覚の詩であった。

1部のトリはテレビ神奈川の番組に出演している伊東友香氏がゲスト出演（のち横浜詩人会に入会）。舞台に立つとパッと花が咲くようであった。自らの歩みをかたつむりに喩え、次の詩では争いの絶えない世の中を嘆いた。その後は加藤氏のピアノソロライブで盛り上がり、休憩となった。

2部の最初は司会の服部剛が1部で朗読された詩の言葉の数々を集め即興詩を朗読。続く池田氏は自身の詩集の題『可能が可能のままであったところへ』という場所を求め、夢の中を導かれるような詩の世界。藤森氏は今年世を去った元会員・故すみさちこ氏の詩を追悼朗読。すみ氏の人生の哀しみにふれる詩であった。

関氏は夕暮れ時にふと目に入った花々に足を止める情景の詩。広

松浦成友さん

相原京子さん

磯崎寛也さん

原田もも代さん

谷口鳥子さん

金井雄二さん

冨田民人さん

伊東友香さん

服部剛さん

池田髙明さん

瀬氏の詩からは、世を去った夫・母との魂の深い絆を感じた。今鹿氏はデカルトを通して語る哲学的な詩。塩路氏はスマホを通して失われたものを問いかけた。光冨氏の詩からは、かけがえのない本との出会いが想起された。

この日2人目のゲストはヤリタミサコ氏。「今・ここ」にいる感覚を語った後、詩人とパン屋を通して創造する素晴らしさを語った。佐相氏は観光地とは一味違う、横浜の過去と現在を行き交う感覚の詩。野木氏が詩の中で語る光は傍らに共にいる存在を思わせ、仄かな希望を分かちあった。加藤氏のエンディング演奏は皆の心に余韻を残し、今年の詩とジャズの宴は幕を下ろした。（文責・服部剛）

※参加者※　相原京子・浅野章子・池田髙明・磯崎寛也・今鹿仙・金井雄二・佐相憲一・紗野玲空・塩路明子・関中子・立木勲・谷口鳥子・冨田民人・野木京子・服部剛・原田もも代・広瀬弓・藤森重紀・松浦成友・三浦志郎・水無川渉・光冨幾耶

○ゲスト　加藤英介・伊東友香・ヤリタミサコ（敬称略）

○他・お客様16名

藤森重紀さん

関中子さん

広瀬弓さん

今鹿仙さん

塩路明子さん

会場・ドルフィー

光冨幾耶さん

ヤリタミサコさん

佐相憲一さん

野木京子さん

詩画展２０２３ 今年のテーマは「旅」

詩人と画家が同一のテーマで作品を制作し、相違を楽しむ、秋の詩画展。９月18日から24日にかけて画廊・楽Ⅱにて開催しました。

今年は詩人30名、画家23名、総勢50名以上の賑やかな展示になりました。また初めての試みとして、寄せ書きコーナーを作りました。いただいたメッセージやお声を抜粋し（　）内、新米担当谷口の感想と共にご報告します。

「香り旅」井上摩耶さん
右足から踏み出した香り旅は「一人で歩いているようで／一人ではなかった」五感のなかで唯一脳にダイレクトに伝わる嗅覚は、センサーの数も桁違いに多いそう。

「ラストドライブ」富永たか子さん
「見とれないで／見とれないで…」御坂峠。青い原稿用紙の青い字に、連れていってもらう。

「私の米代川」相原京子さん
（くもり空のようなふんいきが、伝わってきます。）（久しぶりに旅に出たくなりました。北の方へ。）

「旅に出る」金井雄二さん
「旅に出るとは足袋から指が出ることか」思考は意外とそばから、はみだすものなのでしょうか。

「楽旅—がくりょ」三浦志郎さん
「旅」を逆さにして「ビータ」。自分の位置を教えてくれる「ビータ」は呪文のようにも思える。

「憧れ」山田玲子さん
「旅に暮らすという事を／思う勇気／ただその勇気への憧れ」最終連がとても印象的。

「汽笛」佐相憲一さん
路地裏で、港で、意思の船はわたっていく。黄金いろは汽笛のように港から山へ。

「ロータスロード」紗野玲空さん
（昔歩いた大和路を思い出しました。）自転車は秋篠川に沿って風を切って、過去へ未来へ。

「高原の憂鬱」松浦成友さん
「薄い絹のヴェール」を重ねるように書かれた作品は、薔薇の花のよう。

「あなたの中へ」立木勲さん
人称が混じっていくような、「僕」と「私」の相聞歌。

「空模様のかげんが悪くなる前に」佐々有爾さん
おふくろと僕を乗せ、つばさのかたちをかえ着陸したボーイングが、僕と重なってきます。

「眼」池田高明さん
今も蘇ってくるジョムナ川での眼は、「奥深くを／なんどでも　打ち抜く／眼」

「ひかりのゆめ」野木京子さん
のこってくれたちいさなひかりと、夜も、昼も。移動しつづけることは生きることでも、詩をつづけることのようでも。

「夢のなかの旅」保坂融さん
映画のよう。若き日にみた夢、行ったことのない国の風景とそのときの心情が、幾度と蘇り、心を揺さぶる人生。なんとゆたかな。

「ソックが言うには」奥津さちよさん
カンボジアからの留学生ソックとのお別れの日。「ソックよ　ガイドよ　お元気ですか？」

「日々のあいさつ—洗足池にて」服部剛さん
木陰の小屋で腰を下ろすと、綿毛が「生きるように転がり／私の足下で、また浮かんだ」名を調べ私は、綿毛と握手するよう。

「未定の約束」田村くみこさん
「歳を取ったら／二人でのんびり旅をしたいね」夫婦という得体のしれない曖昧さで引き寄せる「希望」

「水色のたび」谷口鳥子
フェリーに乗ったときに見えたものを並べてみました。

「インドへの旅」梅津弘子さん
インドへの旅の記憶から、今の思いと希望を。

「淡々」真宮治郎さん
使いなれた言葉だけでぼそぼそ話している私たち二人。むかし合唱部だったミポリンと、ガードの甘いボクサーみたいな目の私。ダブルデートのよう。

「Endless Questions」大鹿理恵さん
「眼を開けている間は　会うことが叶わず／目を閉じている間だけ」紅色の丸首シャツでそこに、おられるのですね。

「無題」今鹿仙さん
「旅人は何も読むものがなく／平静をよそおう」そうして、無を実感する旅人。

「ごほうび」方喰あい子さん
「春休みは近くへ　夏休みは遠くへ」ママと、パパと、としくんと、なおちゃん、みんなのごほうびの旅。

「ふたり旅」光冨幾耶さん
「窓の外は青空で、君の顔には通り雨。」見つめ見守るわたしの目。

「海坊主がいた」原田もも代さん
ドッ　ドッ　「大丈夫／なんとかなる　なんとかする」海坊主より強い母。母の娘も、もぐって　もぐって、たくましい。

「秋の旅」関中子さん
見事な筆書きで、秋の旅の、この一日の美しさを。

「旅」大石規子さん
芋掘り、山登り、日光京都奈良、「いつも　わくわく　どきどき」わたしを大きくした旅。さらに、つづくのですね。いそがずにどうか、と願ってしまう。

「森のこえ ひとのこえ」高細玄一さん
それでも道を。「深い黒を自覚し

ながら」耳すましながら、道を。

「蝶」井嶋りゅうさん

（若さというか、動きを感じます）「みんな行くところがあるのだからと／忙しなく暮れていったあの人の旅先を」追う蝶の、色をおもう。

「岬から岬へ」磯崎寛也さん

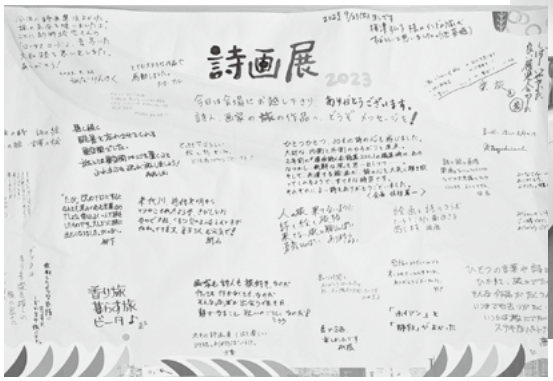
旅をさがして歩く。明星が僕の口に飛び込んできて、「そして鍵を探しあてた／二つの岬は解け合い」不思議に響き交じる足音。

他にも（旅をしたような気になりました）（みなさんのいろいろな旅にご一緒できた気分です）（旅にでたくなる）また、磯崎さんには会場にかわいらしいお花をいただきました。

皆さま、ありがとうございました。また来年、より楽しい詩画展を目指せればと思います。どうぞよろしくお願いします！

（文責　谷口鳥子）

【詩作品出展者30名】 相原京子 池田高明 井嶋りゅう 磯崎寛也 井上摩耶 今鹿仙 梅津弘子 大石規子 大鹿理恵 奥津さちよ 方喰あい子 金井雄一 佐々有爾 佐相憲一 紗野玲空 関中子 高細玄一 立木勲 谷口鳥子 田村くみこ 富永たか子 野木京子 服部剛 原田もも代 保坂融 松浦成友 真宮治郎 三浦志郎 光冨幾耶 山田玲子



会場全景・楽Ⅱ

新入会員紹介

ささやかなつながり

野木ともみ

これまで、私は神奈川の地と自分との関わりを意識したことはありませんでした。生まれ育った所というわけでもなく、学校の遠足や家族、友人で箱根を何度か訪れたことがある、二〇代後半に数年、相模原市に住んだことがあるというくらいでした。改めて振り返ってみると、断片的な記憶ですが、どちらもよかったと思える場所です。箱根への道中の景色や箱根の自然はもちろん、相模原の最寄り駅淵野辺まで、当時は畑や栗林、小さな牛舎を横目に四〇分ほど歩いた日々も懐かしいです。

思い起こせば学生時代の恩師の方々のひとりは鵠沼のご自宅に私たち学生を招いてくださり、将来や世界観について臆せずに話せる場を設けてくださいました。もうひとりの恩師は葉山にお住まいでしたが、青森県深浦のご出身で、たたきあげの生き方を伺い、少なからず影響を受けました。

こうしてみると、神奈川の風景にも人にも、ささやかながらつながりがあったようです。今、横浜市に移り住んで三年目になりますが、まだ三年？と少し意外な気がするのも、そのためでしょうか。

神奈川は海も山も都会も田舎もありながら、私にははっきりした区分けがあまり感じられず、連続している印象を受けます。いい意味で、自分は誰でもない、何者でもないようなおだやかですっきりした心境になります。そのような気持ちでこれからも詩を作ることができたらと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

追悼・村山精二さん

村山精二さんが2023年7月17日、日野原記念ピースハウス病院にて逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

【略歴】
1949年　北海道赤平市生まれ
日本ペンクラブ、日本文藝家協会、日本詩人クラブ、横浜詩人会、日本子守唄協会相模支部、西さがみ文芸愛好会　各会員
㈱神静民報社　神静文芸編集参与

【著書】
詩集『プラスチック粘土』、『午後の構図』、『村山精二取り扱い説明書』、『22時の女』、『特別な朝』、『帰郷』
共著『犬にどこまで日本語が理解できるか』、『文芸作品に描かれた西さがみ』

帰郷

村山精二

鋏の切っ先で靖国神社参拝が斜めに
根元では原油史上最高値が
真っ直ぐに
切られていく

名のある者も次々と斬られて
血の海だ
コイズミがアベが
薮も
袈裟懸けの致命傷

大事な言葉も例外ではない
短歌が俳句が
芸術の前衛と謂われなくなって久しい
詩が
真っ二つになっていく

おまえは無傷か
そうはいかないだろう
余白の人生などと格好をつけても
そこも例外ではない

老いた父が
新聞紙を切っている

第六詩集『帰郷』(土曜美術社出版販売)
より

足柄の地に還った詩人の魂

中村不二夫

村山精二との交流は一九九〇年半ば、日本詩人クラブの集まりを通じて始まった。その後、村山は詩人クラブ理事に就任、主に電子メディア部門を担当し、クラブのOA化に多大な貢献を果たした。村山のHP「ごまめのはぎしり」は、一九九九年一月開始で、ネット詩隆盛の先駆者の一人に位置付けてもよい。

村山のプライベートな側面にはじめて触れたのは、詩集『帰郷』(二〇〇六年)の解説を頼まれたときである。詩集を読んで、母の死後、十歳の村山が八歳の弟を連れて、北海道の伯母を尋ねる「もらいっ子」という作品は衝撃的だった。そんな複雑な成育環境と引き換えに、村山には文学という宝物が与えられた。

村山は富士フィルムを早期依願退職している。そのとき、突如東大を受験すると真顔で言い出したが、だれもが冗談としかとらえていなかった。村山は富士フィルムでも詩人クラブでも、肩身の狭い思いをしていたにちがいなく、大学への進学は悲願であった。私はもっとも卒業が難関な放送大学か、社会人枠での大学院受験を勧めた。もう村山にはそれだけの学力があり、どの大学であっても一般受験する必要はない。だが村山はその夢の実現には向かわず、それもまた、詩人の選択として、正しかったといえるかもしれない。

村山は『帰郷』で横浜詩人会賞を受賞するが、それが生前最後の詩集となった。近年は活動の場を日本ペンクラブにも広げていた。村山は富士フィルム足柄工場で働いていたが、その地の暮らしを背景にしたエッセイ「つばめ」を本会会報に発表。いくつもの顔があった詩人だが、そこには繊細で心優しい人間性が浮き彫りにされており、絶筆とするにふさわしいものになった。七月十七日逝去。会報発行の二日後に亡くなられた。村山はこれを読んで、天へと鳥のように羽ばたいていったと思う。ご冥福をお祈りいたしたい。

《会員消息》（順不同・敬称略）

【入会】
野木ともみ　北村紀子　川島洋

【逝去】
相良蒼生夫

【退会】堀井勉

【名簿追加】
野木ともみ

[redacted]

北村紀子（みちこ）

[redacted]

川島洋（ひろし）

[redacted]

佐々木淑子（としこ）

[redacted]

【新聞記事】
「神奈川新聞」文化時評 現代詩（毎月第1木曜日）光冨幾耶

【テレビ出演】
テレビ神奈川「イイコト！」レギュラーMC（水曜日）伊東友香
同左 ゲスト（月1回程度）磯崎寛也

【詩集】
保坂融『白への回帰』（風詠社）
荒船健次『川崎大師本町』（金雀枝舎）
高細玄一『もぎ取られた言葉』（コールサック社）
佐々木淑子『道は粒子となって』（文化企画アオサギ）

【小詩集】
坂多瑩子『教室のすみで豆電球が点滅している』（阿吽塾）

【詩論集】
金井雄二『げんげの花の詩人、菅原克己』（書肆侃侃房）

【詩誌など】
「アル」68号　阿部はるみ　西村富枝
「いのちの籠」55号　梅津弘子
佐川亜紀　佐相憲一　うめだけんさく
「イリプスⅢrd」5号　中島悦子
広瀬弓
「FRA」21号　草野早苗　荻悦子
方喰あい子
「オオカミ」42号　佐相憲一　日野零
関中子　佐々有爾　梅津弘子
光冨幾耶　塩路明子　荻悦子
坂井信夫　小桜ちゅぴこ
「カナリア」7号　服部剛
「現代詩手帖」10・11・12月号
草野早苗　坂多瑩子　徳弘康代
伊藤悠子　金井雄二　柴田千晶
中上哲夫　中島悦子　福田拓也
「山脈」30号　冨田民人
「詩界通信」104号　浅野章子
「詩人会議」10・11・12月号
高細玄一　うめだけんさく
「詩素」15号　坂多瑩子
「詩と思想」10・11・12月号
佐川亜紀　方喰あい子　新沢まや
中村不二夫　磯崎寛也　鎮西貴信
草野早苗　中山直子　山本聖子
「space」171・172号　坂多瑩子
草野早苗　木島章　中上哲夫
「千年樹」95・96号　方喰あい子
「ターニングポイント」5号　鎮西貴信
「タルタ」61号　堀内敦子　田中裕子
「ちいさな森」28号　関中子
「地下水」249号　森川芳州
植木肖太郎　新沢まや　林柚維
村上きょうこ　鎮西貴信　石原妙子
方喰あい子　保高一夫
「ちぎれ雲」4号　新沢まや　菅野眞砂
「地平線」75号　中村吾郎
「潮流詩派」275号　山本聖子
相原京子　中村不二夫　佐川亜紀
中島悦子　中上哲夫
「天国飲屋」4号　坂多瑩子　鈴木正枝
「とんぼ」17号　服部剛
「波」24号　中村不二夫
故・村山精一
「2cv」6号　田尻英秋
「日本未来派」245号　林柚維
「反射熱」13号　服部剛　佐藤銀猫
佐相憲一
「ひょうたん」81号　山田玲子
「伏流水通信」92・93号
うめだけんさく
「PO」191号　関中子　田中裕子
「MY DEAR」331号　井嶋りゅう
水無川渉　紗野玲空
「モデラート」55号　金井雄二
「流」59号　山本聖子
「竜骨」123号　小林妙子　奥津さちよ
「るなりあ」51号　鈴木正枝

【訂正】通信328号8頁　2段目
誤・「風化」／正・「風花」
謹んでお詫びいたします。

【基金寄付への御礼】
2023年度は20名の会員様から横浜詩人会賞基金に、総額9万6000円のご寄付をいただきました。荻悦子さん、原田もも代さん、匿名さん、高細玄一さん、三浦志郎さん、伊藤悠子さん、冨田民人さん、うめだけんさくさん、あがべなおさん、柴田秀子さん、中上哲夫さん、小林妙子さん、大鹿理恵さん、佐川亜紀さん、磯崎寛也さん、塩路明子さん、大石規子さん、野木京子、中村不二夫さん、山田玲子さん（到着順）、どうもありがとうございました。
会計担当理事・野木京子

2024年度総会のご案内
◎詳細は1月に別便で郵送する一式をご覧ください。
皆さん、ぜひ、お越しください！
総会成立に関わるので、ご欠席の方も必ず返信ハガキで委任ください。
2月17日（土）14時～17時
神奈川公会堂（東神奈川）
内容　①総会　各種議題審議
②記念トーク　椿原頌子氏
③2023年度新会員紹介

【編集後記】今号は賞の贈呈式と講演、詩とジャズの朗読会、詩画展、新会員紹介と盛りだくさんでした。
一方、訃報記事もありました。村山さんの笑顔が偲ばれます。（光冨）

詩人会創立　1958年10月25日
通信創刊　1961年2月10日
会員数　112名